大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

吉田仙太郎先生

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-07-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中堂, 恒朗 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/10497

吉田仙太郎先生

或る一夕，未だ在職中の吉田先生を囲んで外国文学を学んだ我々が酒杯を片手にとりとめも無く話し合った事の一端をここに書き連ねようと思う。

最近，西欧の古典文学を読む人がとみに少なくなった。それと同時に純文学と云う言葉も聞かれ無くなり，その代わりに眼にするものは通俗文学であり，街には大衆文化が氾濫している。日本の近代文学が広く西欧の古典やら同時代人達の作品から大いなる影響を受けて育ってきた事を考えると，隔世の観がする。果たして現代の日本の文学はそれだけに，つまり西欧の先哲の業績を知る必要がないまでに，全く無視出来る迄に成長したのだろうか。答えは否である。その実相は大衆文化の中でしたり顔をする非創造的な，非批判的な似而非文化である。とまれ現在の東京は王政復古後のパリに，ビスマルク政権後のベルリンに酷似している。そこでは投機屋と土地成金を中心とした金権政治とそれと表裏の精神的退廃とが卑猥な Subkultur を作った。現代の日本に生活する我々が，それに勇敢に抵抗した西欧の作家や哲学者達から最早知るべきものを何も持たないとしたら，その自惚れと怠惰を我々は宥すわけにはいかない。

ホメーロス，ホラーテイウスから始まり，カフカ，サルトル，カミュに至るまで西欧文化の歴史の中に投映された人間の感性と悟性の真相を分析解明しようと思えば，それは無限である。それはあたかも小舟で果てしない大海を漕ぐのに等しい。元来，文化との係わり合い方には能動的と受動的な受容の方法がある。自ら文学作品を書かない我々が外国の文化を学ぶ際にはどうしても受動的にならざるをえない。しかし我々はそこから一度受けたものを日本の社会に還元しようとする事で能動的たらんとする，つまりそれを以て日本の文化的土壌のなかへ積極的に，創造的に参加しようと試みる。これは外国文学に携わる者の基本的な姿勢であるが，最近の日本の社会はその受容を完全に拒否する。受容と創造と云う文化の基盤となるべき創造的，批判的相関関係が成り立たなくなってしまった時に社会は猥雑な大衆文化の中に埋没してしまう。我々がこんなとりとめも無い事を

話していると，恰も客が来なくなった和菓子屋の主人が堅くなった大福餅を手に愚痴を云っているとも聞こえる。自嘲からとも，諦めからともつかない皮肉な笑いの内にその場の会話は終わった。その時に常に冷静さを失わずに聡明な意見を云われた吉田先生は今は退職され，寂しい限りである。

その吉田先生はトーマス・マン，ホフマンスタール等の唐木順三の云う精神貴族的な香りの高い作家の研究をされ，またカフカ研究の分野で数々の秀れた業績を着々と上げられ，やがて日本でも屈指のカフカ研究家となる基礎を築かれた。特に先生の手になるG・ヤノーホの“カフカとの対話”(筑摩書房)はつとに名訳の評判が高く，また新潮社決定版“カフカ全集第9巻”に於いて“カフカの手紙1902—1924年”を翻訳されている。その膨大な手紙の非常に優れた翻訳は学会でも高く評価されている。それに同書の巻末に記述された解説文はカフカを研究する者にとって必読の価値がある。元来，秀れた翻訳とは原文に厳密に取り組む事でその精髄を探り出す事にある。その為にはふたつの言語に対して非常に優れた繊細な言語感覚が要求されるが，吉田先生はこの得難い特殊な才能を持ち合わせている日本でも数少ない文学研究者のひとりでもある。先生は，ドイツ文学のなかでも殊に執拗なまでに言葉に拘りを以て人間の内なる世界に鋭く切り込んでくるカフカやマンと云った作家の研究に必要な絶対条件を生来身につけておられると思う。

西欧音楽や美術についても造詣が深く，個々の作品について鋭い評価をなさる事も考え合わせてみると，先生は今や死滅しつつある古き良き時代を生きた教養人，つまりは“高等遊民”と云う種族の生き残りであると云える。この種の階層にマンもホフマンスタールも入っている。我々は物質的には飽食の時代にあって，精神的には貧困の時代にいる。だからこそ物質的には恵まれてはいなかったが，精神的な豊かさを身につけていた文学者達に対して充分な検討を加え，その人々が残していった業績をいろいろな角度から研究する必要がある。我々は吉田先生の研究業績をその意味でも非常に貴重であると評価すると同時に，今後とも先生の御活躍を心より期待する。

中堂恒朗　　渡辺知也